

変わるものと変わらないもの

ーテレビ、体罰、ラグビーー

季刊誌 第8号

ー2023 年春号ー

一般社団法人

子ども未来・スポーツ社会文化研究所



はじめに

変わるものと変わらないもの ーテレビ、体罰、ラグビーー

子ども未来・スポーツ社会文化研究所「季刊誌第8号：2023年春号」をお届けします。

メディア・教育・スポーツと本研究所が対象とする社会文化は、変わるものと変わらないものがあります。今期（第22～24回セミナー）では、「テレビ」、「体罰」、「ラグビー」を取り上げ、変わるものと変わらないものについて考えてみました。

第22回セミナーでは、鈴木祐司氏（次世代メディア研究所）に「視聴率から振り返るサッカーW杯」と題して、お話しいただきました。日本代表が活躍したサッカーW杯カタール大会におけるテレビ中継の視聴率は、日本が初出場したフランス大会以来、最も低かったのです。サッカー熱の変化などもありますが、ABEMAが全試合を配信した影響が最も大きいです。若年層から40代、さらにサッカーファンやSNS利用者など、コアなファンなどが放送からネットへ流れていました。放送と配信が初めて共存した今回のW杯、各種視聴データからメディア状況の変化を考え、今後のテレビの行方を占います。

第23回セミナーでは、西山哲郎氏（理事・関西大学教授）に「スポーツでの体罰指導を支える『感情の共同体』」と題して、お話しいただきました。日本の運動部活動における体罰指導は、厳しく批判され、罰則が強化されているにも関わらず、なかなか根絶できません。これに関して一番厄介なのは、体罰指導を経験した者が、かなりの割合で自らも体罰指導を容認するようになることでしょう。そこには、体罰指導を経験し、それによって成功したと信じる人々が、ある種の共同体を形成し、外部からの批判を遠ざける構造が存在するように思われます。そこで、体罰指導を支持する人々の共同体について、歴史学者バーバラ・ローゼンワインのいう「感情の共同体」論を手掛かりに考察することにしました。分析の対象としては、1980年代から体罰指導の意義を強く主張し、現在もその主張を変えないヨットスクールの指導者、戸塚宏が刊行した書籍を主な資料とします。

第24回セミナーでは、小田伸午氏（会員・関西大学名誉教授）に「多様性とひとつになることの裏腹」と題して、お話しいただきました。一人の子供（one）を育てるのに、子供の地域クラブから大学、プロリーグまですべての年代層の環境、指導者がトータル（all）として受けて次につなぐ方針のもとにラグビー界全体が一体となっていくことを夢見ている雰囲気こそ、一人がみんなのために動き、みんなは一人が動きやすいようにいつもサポートを考えて動くという「一」と「多」の裏腹的双方向性の関係が日本のラグビーの目指してきたものです。このことが日本にラグビーが始まって100余年、幾多の浮き沈みをへて、今、改めて日本のラグビーの目指す方向がこれでいいんだと見えてきた時代が来ているように思います。

ご一読いただき、皆さんからの忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

<目次>

●第22回セミナー・・・P.3～

- ◆ テーマ：視聴率から振り返るサッカーW杯
- ◆ 日時：2023年1月13日（金）20時～21時30分
- ◆ 方法：ZOOMによるオンライン・オープンセミナー
- ◆ ナビゲーター：鈴木祐司（次世代メディア研究所）
- ◆ コメンテーター：黒田 勇（理事・関西大学名誉教授）
- ◆ ファシリテーター：杉本厚夫（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）

●第23回オープン・セミナー・・・P.18～

- ◆ テーマ：スポーツでの体罰指導を支える「感情の共同体」
- ◆ 日時：2023年2月17日（金）20時～21時30分
- ◆ 方法：ZOOMによるオンラインセミナー
- ◆ ナビゲーター：西山哲郎（理事・関西大学教授）
- ◆ コメンテーター：中小路 徹（朝日新聞編集委員）
- ◆ ファシリテーター：速水 徹（主席研究員・立命館大学客員教授）

●第24回セミナー・・・P.28～

- ◆ テーマ：多様性とひとつになることの裏腹
- ◆ 日時：2023年3月9日（木）20時～21時30分
- ◆ 方法：ZOOMによるオンラインセミナー
- ◆ ナビゲーター：小田伸午（会員・関西大学名誉教授）
- ◆ コメンテーター：杉本厚夫（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）

《第 22 回セミナー》

視聴率から振り返るサッカーW 杯

鈴木祐司（次世代メディア研究所）

はじめに

メディアを通じて、今回のサッカーワールドカップ、もしくは前回と比較してどういうふうに見られたのかということと、Abema TV では本当はどう見られていたのか、それから視聴データを使うと何ができるのかという説明をし、最後にテレビは今後どうなっていくのかというお話をします。

1. プロフィール

鈴木祐司プロフィール

1958年：愛知県生まれ
1982年：東京大学文学部卒業
同年：NHK入局。
函館、東京、大阪でNHKスペシャルなど、主にドキュメンタリー番組の制作を担当。

主な作品：NHK特撮「そして山は荒廃した」（地方の時代賞）
ドキュメンタリー90「看護婦さんを確保せよ」
ドキュメンタリー91「社員交代」
NHKスペシャル「病院再建の内幕」（93年・ギャラクシー賞）
NHKスペシャル「アメリカPL 新松」（95年）
NHKスペシャル「テレビは新たな時代へ」（03年・テレビ50周年・放送記念日特撮）
テレビ60周年特集「1000人が考える テレビ ミライ」（2013年）

1997年：NHK放送文化研究所に異動
2003年：放送総局解説委員室解説委員兼任
2009年：編成局編成センターに異動
2014年：独立 次世代メディア研究所設立

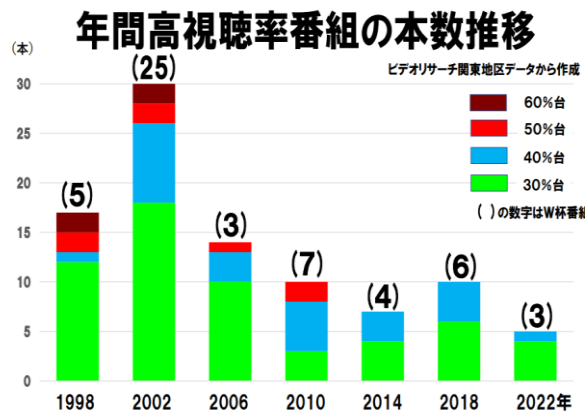


私は、1982年にNHKに入局し、97年に放送文化研究所という放送を研究するところに異動を命じられました。その後、放送総局解説委員室解説委員として、兼任で、画面に出て喋ることをやっていました。

2000年代に、いろいろなところで、「放送の未来はもう暗いよね」というふうに、私は喋っておりまして。そうしたら、経営者から放送の未来が危ない

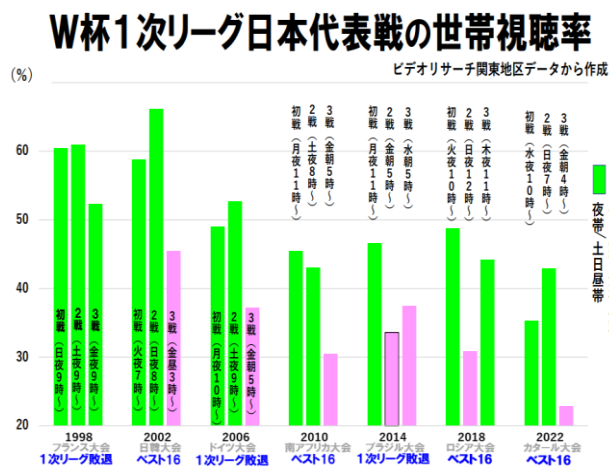
のだったら自分で大丈夫なようにやってみせろ、ということで、編成局編成センターに異動をしまして、いろんな取り組みをしました。けれども、結論から言うと、NHKにいても十分な変化を起こせないということで、独立して、現在に至ります。番組制作、民放調査、視聴者調査をし、また、旧郵政省（現総務省）の行政はメディア放送をどう考えているか。この4つの領域をNHK時代にいろいろと踏み込ませていただいたおかげで、独立した現在の仕事ができているというこんな感じの人間でございます。

2. サッカーW杯の見られ方とテレビ視聴率の動向



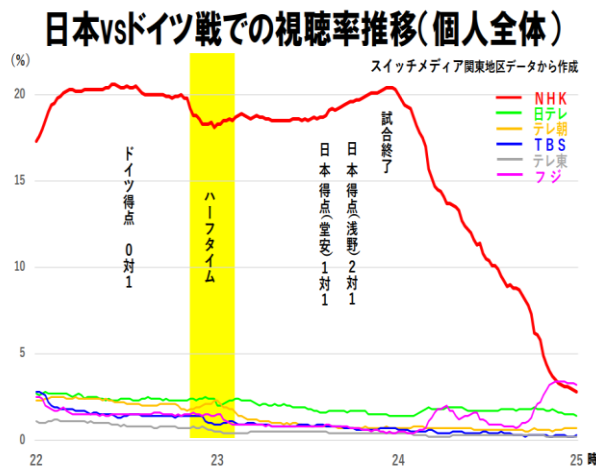
これは、視聴率がどんどん下がっているということです。一番上の茶色のところは、世帯視聴率が60%もあったということで、2002年の日韓の調査のときまで、こういう数字も出ていました。50%を超えるということも2010年ぐらいまでありました。それ以降、どんどん下がっています。フランス大会で初めて日本が出場し、ここから熱狂が始まりまして、日韓共催のところでピークだったのかなと思います。その後は、残念ながら、それほど熱が持続してない。サッカーワールドカップに限らずで、一般の番組もどんどん数字が下がっています。例えば、ドラマでいうと、かつては30%を超えるドラマはいっぱいあったのですが、今世紀に入るとなかなか20%を超えなくなってきて、現在では10%を超えたら合格点といわれるぐらいに、どんどん視聴率自体は下がっています。

3. W杯1次リーグ日本代表戦の視聴率の推移



ワールドカップ1次リーグの日本代表戦の世帯視聴率を98年から全部並べてみると、このような図になります。色が2つわかれており、緑は、平日のプライムタイム、夜の時間帯、もしくは土日で、いい時間帯に放送したときです。ピンクは、平日に限らないですが、深夜早朝、もしくは平日の午前、昼間で数字が取りにくいところです。これを並べてみても、一目瞭然だと思えますけれども、徐々に数字が下がってきています。ロシア大会の初戦とカタール大会の初戦のドイツ戦は、条件がほぼ同じだったにも関わらず、下がってきています。そもそも、テレビは、というところでいいますと、98年フランス大会当時は、ゴールデンタイムにテレビのついている家庭は7割を超えていたのです。それが現在は50%ちょっとしかなく、テレビがついてない家庭がものすごく増えています。

4. 2022 年カタール大会での日本代表戦

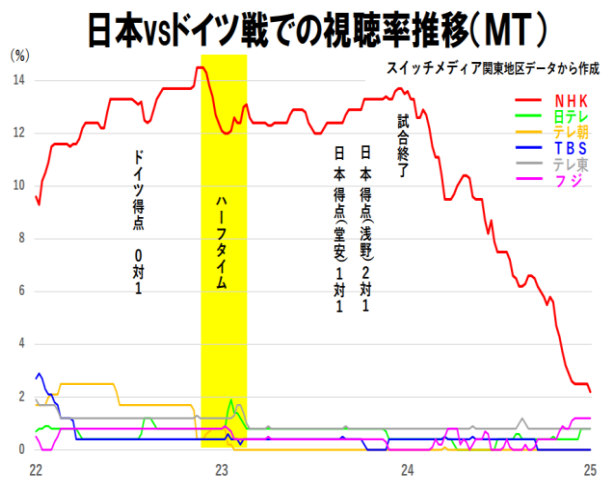


初戦のドイツ戦の個人視聴率の波形です。世帯視聴率とは違います。これで見えていただくと、まずおわかりいただけるように、数字が下がってきたといいますが、ワールドカップ日本代表戦はものすごい数字を取ります。

日テレ以下の他の局と比べると、ドイツ戦を放送した NHK は、圧倒的に数字を取りました。他局は全滅に近かった。日テレは、この日の 10 時台に「ファーストペンギン」というドラマをやっていましたが、前の 4 週と比べると 4 割ほどの視聴者を失っています。テレ朝の報道ステーションは、普段は強いのですが、報道ステーションも 6 割減です。11 時台の日テレの news zero は、若者にも、そこそこ見られている番組なのですが、残念ながら news zero も半減で、ワールドカップ日本代表戦を放送するとその局がひとり勝ち、この日は NHK のひとり勝ちになります。

個人全体の波形を見てみますと、まず、ハーフタイムでガクンと下がる。試合をやっている最中は、皆さん、関心があるのだけれど、ハーフタイムは他のチャンネルに変えたり、テレビを消したりする人が結構いるということです。それから、ドイツが先に得点して 0 対 1 だったので、やっぱり勝てないなと思った人がいて、微減します。ところが、後半で日本は堂安が 1 点を取って同点、さらに浅野が 1 点を取って 2 対 1 と逆転すると、みるみる上がり始めまして、試合終了の日本が勝った瞬間ピークになり、その後、急減するという動きです。

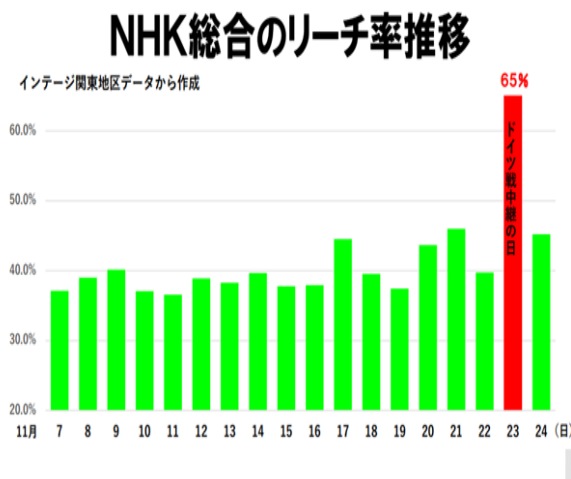
5. 日本 VS ドイツ戦での視聴率推移 (MT)



さきほどは個人全体ですけど、今回は MT と書いてあります。これは male teen という意味で、13 歳から 19 歳までの 10 代の男子です。さきほどの波形と比べると、上下動が激しいです。やはり、今の若者の方がザッピングをよくするということがひとつあります。例えば、ドイツが得点して、ああダメだというときにちょっと、いったん別の番組見てみよう、と、逃げてしまう人がいます。それから、SNS をよくやっている人が多いです。SNS で「日本は結構、頑張ったぞ」という

と戻ってくる。そういう動きが激しい。個人全体と MT を比べてみるとこのような感じで、そもそも若者の方がテレビを見ないというのがあります。そして、動きが激しいというのが、ここで確認できたと思います。

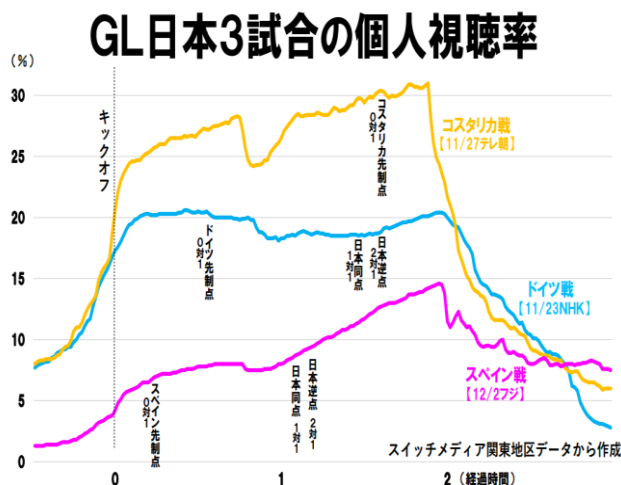
6. NHK 総合リーチ率推移



NHK の立場から見ると、ワールドカップサッカーの試合はどう位置づけられるのか。国民全体の何割に NHK の番組放送が届くのかというと、普段は 40% あるかないかのところ、このドイツ戦があった日は、これ一発で 65% になっています。ものすごく多くの人たちに届けられる。公共放送 NHK は、電波を国内全地域にあまねく届けなければいけないのと同時に、全ての国民になるべく届けなければいけないという理念があるのです。

けれど、実は普段は 4 割ぐらいしか届いていないのです。しかし、こういう大イベントだと一発で 65% になってしまいます。逆に言うと、関東で 130 万台強のインターネットにつながっているテレビのデータでは、130 万台の中の 13 万 5000 台近くは、その前の 1 週間全く NHK 見てなかった人たちですが、この人たちがドイツ戦で NHK に来る。だから NHK は少々放送権が高かろうが食らいついていく。しかし、皆様の受信料をこういうことにガンガン使っているのかというような議論が今後、必ず起こってくるのです。

7. グループリーグ日本 3 試合の個人視聴率

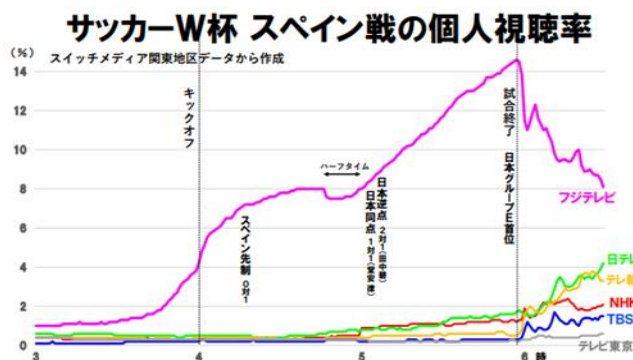


ドイツ戦の次にテレビ朝日さんがコスタリカ戦をやりました。これは休みの日の夜 7 時ぐらいから始まっていますので、ご覧の通り、ものすごく数字が高いです。多くの人たちが、見ていたということなのですが、誰が増えているのかっていうところがポイントです。ハーフタイムの谷がすごく深いですね。民放さんですので、ずっと解説したり、ハイライトをやったりしているわけではなくて、CM がたく

さん入るので、だから逃げるということも当然あります。そうなのですがけれども、普段から

サッカーがものすごく好きというわけでもない人たち、つまり、にわかサッカーファンが来ていますので、その人たちはハーフタイムになると、ぱっと逃げてしまうということがおわかりになるかと思います。ドイツ戦は、もう少し夜遅い時間帯で 10 時ぐらいなのですが、視聴率がフラットです。つまり、これはずっと見ていた人が比較的多くて、出入りが少なかった可能性がある。ところが、コスタリカ戦はずっと右肩上がりになってきていますので、それほど、サッカー好きではない人たちは、前半は見ずに、後半に入ってすごいらしいということで、どんどん入ってくる人が多かった。いかに、にわかサッカーファンが多かったのかということがよくわかります。負けたというのがわかった瞬間にどっと逃げていきます。自分の見たいところだけを見る人がたくさんいるというのが、この違いなのかと思います。

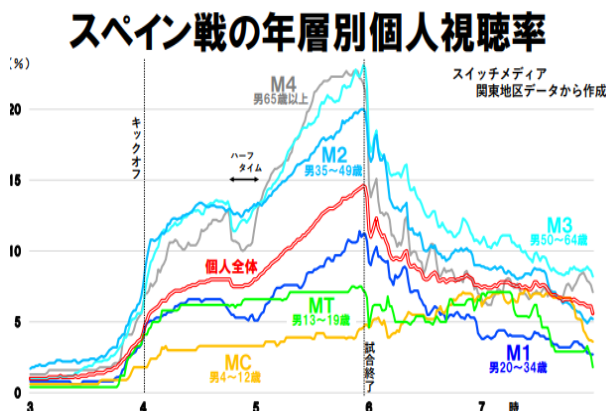
8. サッカーW杯スペイン戦の個人視聴率



スペイン戦は朝の 4 時だったので、また、大きく違うのですね。右肩上がりになっているのは、4 時に起きられなかった人が多くいたからだろうと思います。もしくは前半戦はラジオで聞いていたり、Abema TV や、スマホで見ていたりして、後半になって 2 対 1 になり、ドイツのと

きと同じで、先制されてダメかなと思ったら、同点になって、逆転した。「すごいぞ」ということで起き上がって、大きなテレビ画面で見ようとした人がたくさんいた可能性があります。このようにグループリーグ 3 試合の波形がこんなに違います。もうひとつ違うのは、このスペイン戦の勝利で首位通過が決まったということもあって、放送が終わってから逃げる人が少ないという違いがありました。もう少し細かく見ると、こんなふうになっていまして、ハーフタイムでもこの人たちはほとんど逃げていません。

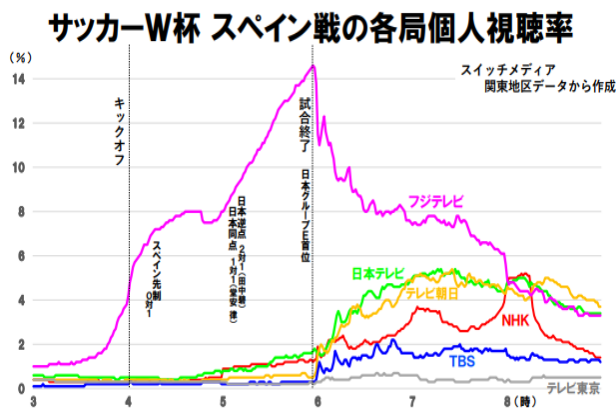
9. スペイン戦の年齢別個人視聴率



年齢別で見ると、ちょっと面白い現象が起きています。午前 3 時台というのは、全体でもほとんどテレビがついていませんが、この日は、中継したフジテレビの視聴率が 3 時台の後半には 8% ぐらいまで上がった。やはり、ワールドカップというのはものすごく大きく人々を集める力があるということです。年齢別の波形の何が面

白いかというと、まず、子どもたちです。MC が 4 歳から 12 歳の男子、MT が 13 歳から 19 歳の男子ですけど、この 2 つの層は試合中ずっとフラットです。他の年代はみんなどんどん増えていくような右肩上がりなのですが、この 2 つの層だけがすごくフラットです。つまり小中高生ぐらいの人たちで、サッカーが本当に好きという人は、ちゃんと 4 時ぐらいから起きてずっと見ている。それほどサッカー好きではないとしたら 4 時、5 時に起きない。そういう年代である可能性が非常に高い。これが M1、M2、M3、M4 と年代が上がっていくのですが、年代があがるほど、右肩上がりの角度が高まっていく。サッカーをやっているコアなファンが 10 代には当然います。年代が上がっていくと、にわかファンの比率が高いというふうなことが想定できるのではないかと思います。

10. スペイン戦の各局個人視聴率



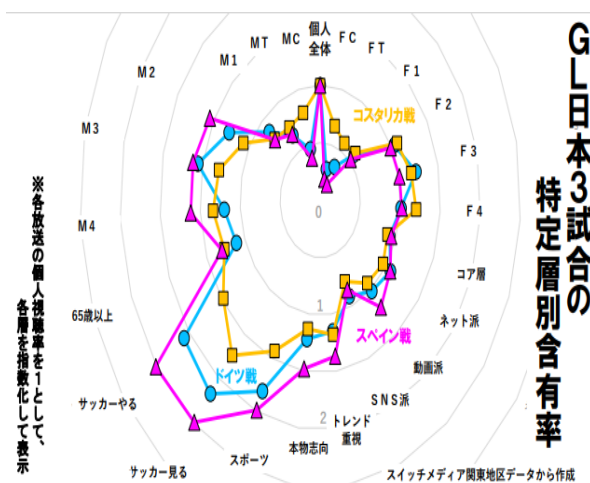
それから、試合が終わってからの余韻が長続きするという話です。フジテレビは、「めざましテレビ」を 6 時台、7 時台にやっていた。普段の「めざましテレビ」と違って、ほとんど、この日のサッカーの試合か、もしくは第 1 戦、第 2 戦についてで、ベスト 16 以降はどうなるかなど、情報番組なのに、サッカー情報番組みたいになっておりました。

結果はわかっているけど、嬉しくてそれを反芻する人たちがずっといて、普段の「めざましのテレビ」の 6 時台、7 時台よりも遥かに高い数字になりました。それぐらいに影響力が強い。さきほど、NHK はサッカーワールドカップのおかげでリーチが高まると言いましたが、民放さんも、中継の試合以降にも大きな波及効果がある。

余談ですけども、ジャパンコンソーシアムという言葉がありまして、オリンピックとかサッカーワールドカップの中継権は NHK と全民放で、お金出して買っていたのですが、前回ぐらいからワールドカップはテレ東が抜けて、今回は日テレと TBS が抜けています。オリンピックは同じように放送権料が高いのですが、ジャパンコンソーシアムはずっと維持されています。なぜ、そういうことが起こるかということ、サッカーワールドカップはそのときの映像は中継で参加した局だけがもちろん使えるわけですけども、その後の 4 年間、ふんだんに使えるという契約になっていないのですね。オリンピックは、終わった後の 4 年間、いろいろな番組にオリンピックの映像が使えます。そうすると、テレビ局はどう考えるかというと、吉田沙保里さんが一番いい例なのですが、霊長類最強の女みたいな勝手なレッテル貼ってバラエティー番組に出しまくって、そのときにオリンピックの映像をふんだんに使う。つまり、中継番組だけではなくて、普段のバラエティー番組やもろもろの日常の

番組でも、オリンピックをいじり倒して数字があげられる。ところが、サッカーワールドカップはそうになっていないために、今回は日本テレビさんとTBSさんは逃げましたということなのです。中継していないために、日本テレビやTBSの6時、7時台の情報番組は、写真しか使えなかったと思うのです。写真しか使わないために、全然数字が取れないというようなことがありました。

11. 視聴者層による違い

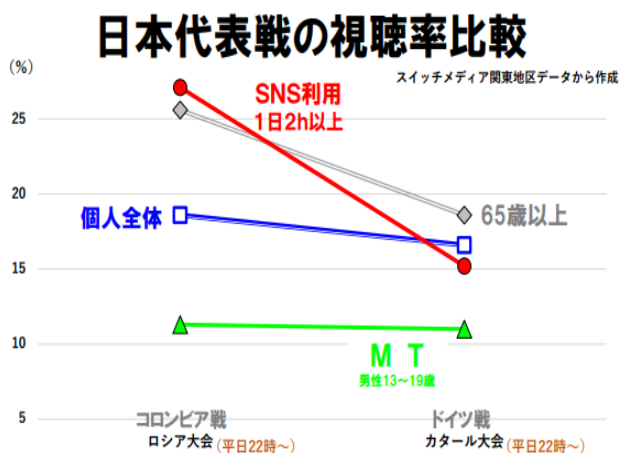


ドイツ戦、コスタリカ戦、スペイン戦の今回の3戦でどういうふうに視聴者層が変わっていたのかというのを、個人視聴率の部分で1として、それ以外の特定層の含有率を指数化しています。

スペイン戦が、一番特徴がありますね。コスタリカ戦はなんとなく形が普通になっています。これは視聴率が高かったためにいろいろな人が入っていたということですね。ドイツ戦は夜10時に始まっていたから、コスタリカ戦より

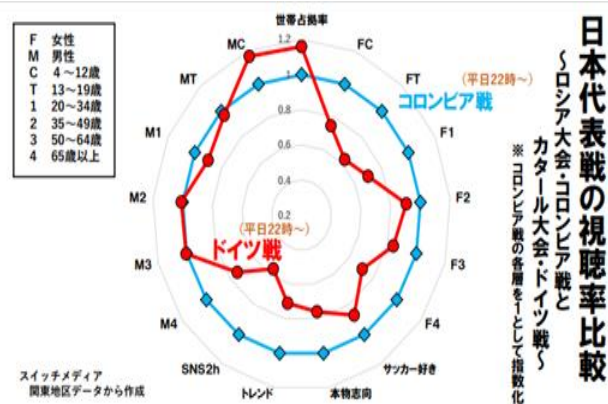
はちょっとサッカーが好きな人たちやM2、M3が多いですね。女性で見ると、コスタリカ戦に対して、ドイツ戦、スペイン戦のように、ちょっと時間が悪いと小中高校生の女子たちは見なくなるという特徴があります。それで、もう一つ面白いと思うのはトレンド重視の人とか、本物志向とか言う人たちもスペイン戦のところでぐっと高くなっています。

12. 日本代表戦の視聴率比較



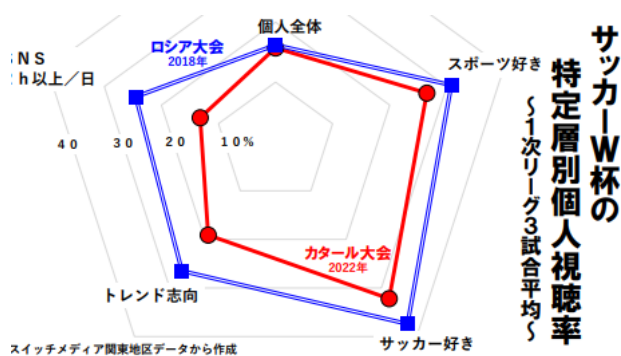
個人全体は、若干下がっていますけれど、そんなに大きな差がありませんでした。放送時間もそんなに違ってないです。ところが、SNS利用者の間では大きく違ってきますよね。65歳以上が違っていったのはなぜか、私わかりませんが、インターネットの影響がこの4年間で、テレビの見方に影響した可能性があるというのが、推測できます。

13. 日本代表戦の視聴率比較—ロシア大会・コロンビア戦とカタール大会・ドイツ戦—



もう少し詳しく見ていきましょう。コロンビア戦の各層を1として、ドイツ戦を指数化していくと、M1が落ちていまして、女性も落ちています。それから、SNSが2時間以上あるヘビーユーザーが落ちていまして、トレンドに敏感な人たちも落ちていまして、本物志向も落ちていまして。こういうふうなことがありました。

14. サッカーW杯の特定層別個人視聴率 1次リーグ3試合平均



3試合全体の平均で比較すると、個人全体で若干減ったのですが、スポーツ好きはちょっと減っています。サッカー好きもちょっと減って、トレンド志向とかSNSヘビーユーザーで大きく減っていることがわかりただけ

るかと思います。この辺が、簡単に言うと、Abema TVが全64試合中継をやり、それ以外にもAbema TVの放送の仕方いろいろと特徴があったために、やはりAbema TVの影響というのは可能性がありますよ、というのがここまでのデータではいえるのではないかと思います。

15. おまけ1 Abema TVの真実

Abema TVは間違いなく大躍進しましたし、テレビに影響を与えました。ところが、巷間と言われるほど、そこまで大きな影響があったかどうかは実は怪しい。だから、ダメといっているのではありません。インターネット全般にそういう傾向があるのですが、インターネットの皆さんも正確なデータを出していかないとなかなか世の中が良くならないかなというふうに、私は思っている立場の人間です。

そこで、あえてAbema TVは、本当はどんなものだったのかっていう話をさせていただきます。全64試合を放送したので、ものすごくお金を払ったらしいです。藤田さんは、ものすごく勝負強い方だと聞いていますが、この勇気がすごかったと思うのです。それなりの当然評価も得たし、影響もあったと思いますし、Abema TVの経営にも大きなプラスがあったのだと思います。

簡単に言うと Abema TV では、全 64 試合を中継し、同時に 2 試合を見ることができたり、いつでも、どの試合でも見ることができ、オンデマンド、マルチアングルであなただけの好きなアングルを選べたり、というふうに、

テレビではできないことをいろいろやっていたということは、まず評価すべきだと思います。テレビは視聴率というパーセンテージです。インターネットの世界は再生数がどれだけとか、視聴者数という実数です。テレビのリーチで何人とインターネットのリーチ何人というモデルでそのまま比較すると大混乱が起こってしまう。

放送では2つの実数あり

①平均推計視聴数 = デジタルでのアクティブ ユーザー数

②平均推計到達数

番組平均視聴数 = デジタルでの同時アクセス数

AbemaTVでは複数の数字で混乱

①同時接続数

②視聴者数

③視聴数 = 実際は延べ視聴回数
同時接続数は未発表

IT メディアさんから Abema TV の同時接続数 2300 万人という記事が出たのです。ところが記事が出て 20 分後に同時接続数ではなくて、視聴者数は 2300 万人に訂正されました。さらにその 8 時間後に視聴者数ではなく視聴数 2300 万人となっています。この事情に詳しい方は、ヤフーのコメント欄に、同時接続は 500 万ぐらいだろうというふうにコメントさ

れておりました。なぜ、これほど差があり、視聴数 2300 万となっているのかというと、Abema TV さんのカウントの仕方に課題があるのだと思うのです。1 人の人が見ていて 1 回止めてまた戻ってくると視聴 1 ではなく、視聴 2 になる。さらに言うと、マルチアングルを 1 人の人が A アングル、B アングルといじったところ、視聴数がどんどん増えていってしまう。同じ人間が重複カウントされていて、この人のいうところの同時接続が 500 万ぐらいだったのが 2300 万というように 4~5 倍に膨らんでしまった。信ぴょう性がどのくらいのものなのかがよくわかっていないのが現実です。

16. おまけ 2 視聴データの活用

NHK で 12 月 25 日に「総集編 挑戦者」たちという 70 分ぐらいの番組ありました。これを流出率というデータで、番組の構成と比較しました。番組構成自体は、一次リーグのグループ A、B、C と紹介していき、グループ E は日本が入っていたので長くやり、その他大勢で E、F、G をやって、ウクライナ問題があるのでポーランドのレヴァンドフスキ選手の話をしやりました。後半になると日本のベスト 8 の戦いで、日本はここで負けてしましますが、ベスト 8 各国の戦い、準決勝、決勝という極めて順当で、誰が考えてもこのように考えるだろうなという構成になっていました。

私は民放の研究もいろいろやってみて、仮に、民放さんが芸人をたくさん入れて面白おかしくやるのではなくて、NHK と同じこういうドキュメントを作ったとしても、このよ

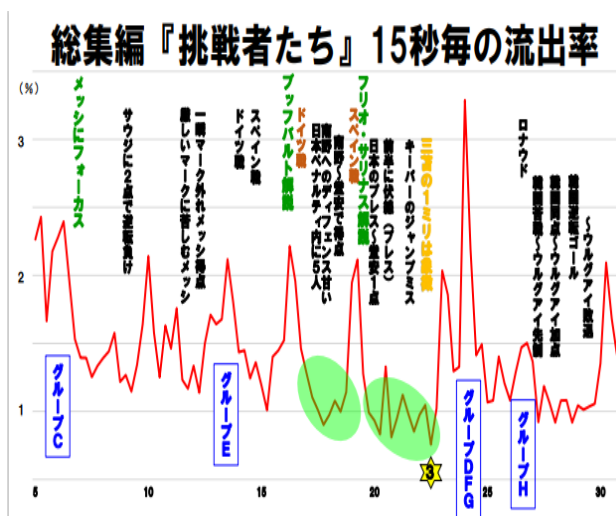
うにはつないでこないでしょう。民放だと、恐らく、日本が入っていたグループ E をトップにし、これよりもっと長くする。それで、B、C、H には有名な選手がいるので、若干長いのですが、その他のグループは、端折っていき、レヴァンドフスキ選手を入れたかも怪しいと思います。テレビの作り方は民放と NHK では、このような違いがあるかなと思っています。

17. 総集編『挑戦者たち』15 秒毎の流出率



さらに、もう少し細かく見ます。メッシにフォーカスした瞬間にグッと下がります（流出率なので、低いほど良い成績）。最初は負けてしまい、後がなくなって、厳しくマークされているけど、一生懸命 1 次リーグ突破しましたみたいな物語で、流出率が下がっています。

最初の方は自分と関係ないなと思っている視聴者もいっぱいいるので、結構逃げてしまうのです。だから、さきほど、私が言ったように民放さんだったら、早くみんなの自分ごとである日本代表の話をやり、長めにやっておいて、その他はコンパクトにやる。また、日本のベスト 8 の戦いがあって負けたけど、ここから先は有名選手が勝つので面白くできます。こんなふうに視聴者の反応というのはやはり思っている通りに反応しています。

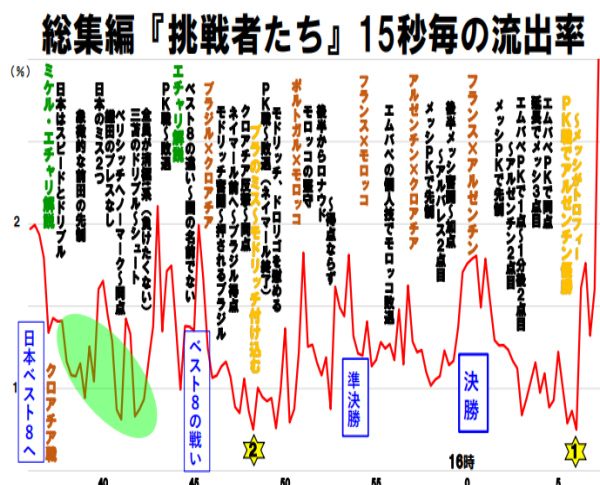


面白いなと思ったのは、ブッフバルトの解説やフリオ・サリナスの解説が始まると、映像で見ているだけではわからない、専門家の切り口に「へえ、面白い」ということで、より注目してくれる。

このフリオ・サリナスが解説した三苦の 1 ミリの部分は、なんとこの全放送の中の 3 番目に低い流出率で、つまり、視聴者が最も注目していたのです。さきほど、私が言いましたように、その

他大勢のグループ D、F、G はみんな逃げっていますが、グループ H になるとまたロナウドが出てくるので、そこそこ頑張ったし、韓国が頑張ったということで数字が取れています。

こういうわけで、普段の普通の人が気づかない解説が、いかに大切かが、この流出率データで見えてきます。つまり、こういうものをちゃんと使うと、もっともっと番組は面白くできると私は思っているのです。けれども、残念ながら、放送の現場の人たちは、こういうデータを制作にちゃんと生かすという習性がありません。番組を作るときには、一生懸命考えて作っているのですが、終わったら、ワーッとお祭り騒ぎで酒飲んで終わってしまっ、なかなか次に繋がりにくい傾向があります。



後半もそうです。このミケル・エチャリの解説のところがやはり圧倒的に強い。ベスト8以降になると、こんなふうにブラジルがミスして、そこにモドリッチが付け込んだのですよ、というところがすごく高くなり、それからPKで最後アルゼンチンが勝つ瞬間というのは非常に面白かったみたいです。視聴データの技術がどんどん進化しているんなデータが取れるようになってい、

これで番組の解説分析をするってこともできますが、当の番組現場がこういったものを使ってより進化させることをやったらもっと面白いなというふうに思っています。

解説が面白いというのは、ずっと前に山際淳司さんの「江夏の21球」という本があって、それをベースにNHKが特集番組を作ったことがあるのです。既にもう30年近く前ですが、あれで証明されていたなと、私は思うのです。たった21球しか投げていないのですけれど、1球1球にピッチャー、キャッチャー、バッター、監督、野手はどんなことを思っていたのかということをもう1回、取材しなおして、再構成すると、映像で見ただけ以上のものすごく面白い物語があるということです。

スポーツ番組はまだまだ進化の余地がいろいろあるではないでしょうか。特に映像を撮ること自体、昔よりもどんどんカメラの台数が増えていますし、いろいろな人に話を聞くことが可能になってきています。番組というのはどんどん進化する余地があるなとデータ分析してみて、つくづく私は思いました。

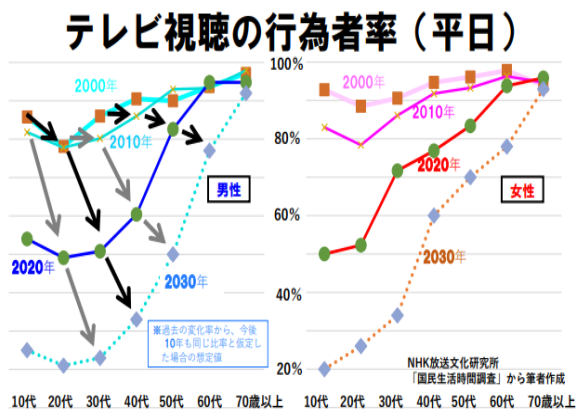
18. テレビの未来

最後にテレビの未来の話です。残念ながらテレビの未来はものすごく暗いです。NHK放送文化研究所はもう何十年も前から、5年ごとにテレビ視聴の行為者率（1日に5分以上テレビを見た人が何割いたのか）を調べています。これを見ると、2000年から2010年はあまり大きく変わっていません。女性のベースがちょっと減りましたが、2010年ぐらい

まではテレビは大きな危機を迎えていませんでした。ところが 2010 年から 2020 年にかけてはものすごく数字が下がっています。

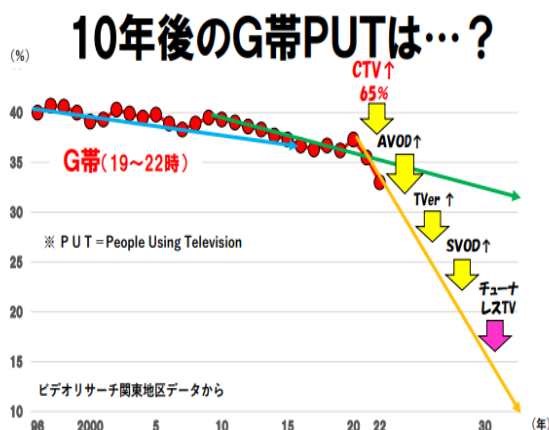
そして、どうして、この矢印をつけているかというと、2020 年の 20 代は 2010 年の 10 代でした。同じ層が 10 年たったらどうなったのか。テレビの 2020 年の 30 代は 2010 年の 20 代で 2000 年の 10 代です。2000 年からの 10 年間はそれほど、変化していないのですが、その次の 10 年でガタッと下がります。30 代まで大きく下がっていますし、40 代でも下がっています。50 代はそれほど下がっていない。逆に 60 代 70 代を下るところか上がっています。定年を迎えて、やる事がなくなり、テレビを見る時間が長くなるという人たちが結構いるという話なのです。

19. テレビ視聴の行為率（平日）



10 年後の 2030 年は、同じ感じの変化というわけにいかないでしょうけども、私がドタ勘で矢印をつけると、50 代まで結構やばいですよね。30 代にいたっては 3 割を切ってきます。40 代でも 3 割ぐらいいきません。というわけで、テレビを見るという行為、リアルタイム視聴は、私がドタ勘でつけたものよりも、もっとひどくなるかもしれません。

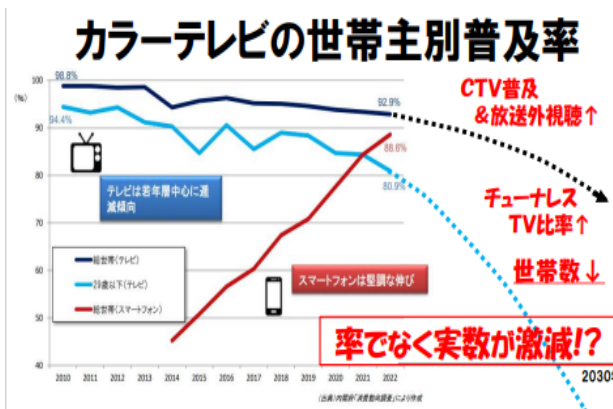
20. 10 年後の G 帯 PUT は…？



ビデオリサーチさんのゴールデンタイムの PUT（総個人視聴率）です。これを見ると 90 年代の末から少しずつ下がっていました。ところが 2010 年以降は下がり方のカーブが激しくなっていて、2030 年に向けてはさらに下がり方が激しくなるでしょう。2020 年以降、つまりコロナがあつて一旦上がったように見えますけど。実はその後、急激に下がっています。このペースで下がってしまうと、PUT が 2030

年の頃には 15% ぐらいになってしまう。NHK と民放 5 局ありますから、6 局で 15% を奪い合おうと、1 局あたり 2.5% ぐらいしかないのです、これは非常にまずいという感じがします。

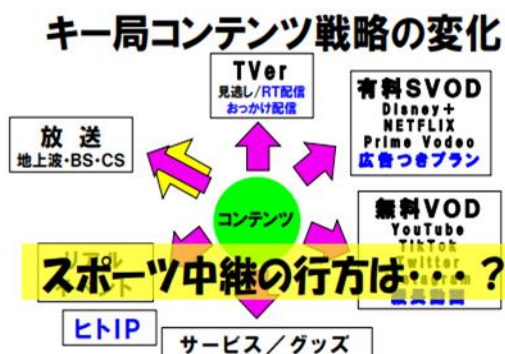
21. カラーテレビの世帯主別普及率



無料の動画が今インターネット上にあふれています。

映像で見るといのは、人々の可処分時間を奪い合っていますから、当然テレビを見る時間が奪われていきます。

22. キー局コンテンツ戦略の変化



それではたまらないということで、テレビ局が主導している TVer(見逃し/RT 配信) は、テレビ局の放送に影響を与えても関係ないというので、必死になって TVer で見てもらおうという方向転換を 2 年ぐらい前からしています。その結果当然 PUT は下がっています。

SVOD (定額動画配信サービス) は Netflix が一番有名ですけど、Disney+もあります。有料なので会員数がそんな大きくなりえないかと思いきや、意外と大きくなってきています。広告付き SVOD サービスが始まっていますので、やっぱり彼らが可処分時間を奪ってくる部分もどんどん増えています。

とどめはチューナーレステレビです。チューナーがない分だけ、当然モニターの値段が安いのです。さらに放送法上、NHK の受信料を払わなくていい。昨年の春から民放さんはゴールデンタイムの番組は全部リアルタイム配信を始めました。そうすると、別に NHK は見なくても、民放さんの夜の主な番組が見られるし、見逃しでほとんど見られるので、もうチューナーレステレビでいいとなり、放送をリアルタイムで見る人は激減する。というわけで、この 2 年で起こった下がり方は今後も簡単には収まりそうにありません。

現状で国民の 7% ぐらいの人たちはテレビを持っていません。世帯主が 29 歳以下の 2 割の人が持っていません。スマートフォンの普及状況はまもなく 9 割です。コネクテッド TV が普及し、リアルタイム放送以外で視聴する人がどんどん増えてきます。チューナーレステレビの比率が高まって、カラーテレビは本当に壊滅していくと思います。

そして、世帯数が下がり始めました。今、比率の話をしていますが、実数でも、どんどん下がっていく。テレビ局の経営は今までのやり方のままだとすると厳しいですが、テレビ局も座して死を待つ気は全くありません。今まではこの放送が中心でしたけど TVer にどんどん力を入れていますし、有料の SVOD、無料の VOD にコンテンツを出して、こういったところで広告収入を得るとか、それから配信料としてたくさんのお金をもらうという方向に切り替えています。放送の一本足打法はもうやめています。それ以外にはサービスグッズがあります。1 個ドラマを作ると関連グッズがすごく売れる、アニメでもいろんな商品売る。さらにリアルイベントをやることによってそこでの会場収入とか、そこでもグッズ販売とか、多角経営化していきます。放送は細っていき、他が太っていく。こんなふうにはテレビ局も変わり始めます。10 代 20 代の人たちは縦長動画をすごく見ている。テレビ局も、新聞社も、こういったところに踏み込もうとし始めています。

それからヒト IP という言葉がありますけど、IP というのはインテレクチュアルプロパティ、知的財産です。ここにヒトがついています。わかりやすく言うと NiziU を思い出してください。NiziU が活躍すればするほど日テレに収入が入るような仕組みです。そうするとスポーツ中継の行方としてはテレビ局から見ると高い中継権でスポーツにいつまでしがみつくのかというこういう判断ポイントがやってきてしまう可能性が高いということです。

《黒田勇（理事・関西大学名誉教授）のコメント》

私は今日参加されている産経新聞の北川さんに大会前に取材を受けて、今回がテレビの世界カップ中継の最後になるのではないかとこの話をしたので、まさにそれを今日の視聴率の関係からも詳しく説明していただいたので、ありがたいと思いました。

解説の面白さ、重要性をおっしゃったので、私はあえてそこに引っかかりたいと思います。というのは、解説以前にやはり今を共有している魅力、ハラハラドキドキで次の瞬間がわからないというのがスポーツ中継の魅力だったと思います。今回、Abema TV の実際の視聴数がどれだけだったかは別にして、本田の解説が面白いということを若い子たち、とりわけマニアックな子たちが言うのですが、そういう面では、これからの時代は今、何が行われているかということよりも、一歩離れて、それについての解説というか、語りというのがかえって次の時代は大事になってくるのかなと思いました。私は古い世代なので、ずっと NHK および地上波を一生懸命見ていて(笑)、Abema TV はあえて見なかったのですが、この辺を鈴木さんにスポーツ中継における「解説」とは何かについて少し触れていただければと思います。

《鈴木祐司（次世代メディア研究所）のコメント》

解説が重要だったのは、中継ではなくてその後なのです。中学 3 年の息子がサッカー部でサッカーが好きなので、彼の行動を見ていたのですが、あの子たちは Abema TV にいる。本田は代表のプレーヤーたちと同じ目線、内部からの話を言っているような感じ

で、感覚で言うと友達ではないのですが、同じ地平の人たちがしゃべっている。NHKをはじめテレビの中継は上から目線で言われているような感じがして、つまり学校の先生が言っているみたいな感じがして拒否感があるのですね。

私も解説は最小限で、現場の音声と映像で十分に戦えると思っています。今後、まだ、テレビでのワールドカップの放送があるのであれば、そこは工夫の余地があると思う。私が、放送が終わった後の番組で解説がすごく重要だといったのは、あれによってサッカーファンが掘り起こせると思ったからなのです。なるほど、ビデオだけではよくわからなかったけど、本当はこういう一面があるのだと、面白いスポーツだと。やはり、こういう本当の専門家の卓越した解説は業界というか、サッカー業界は重視しなくちゃいけないというふうにも思っているの、あえてお話をしました。

《第 23 回セミナー》

スポーツでの体罰指導を支える「感情の共同体」

西山哲郎（理事・関西大学教授）

はじめに 体罰指導が常習化するスポーツ環境の発展史

今回のセミナー報告では、日本のスポーツ界に広くはびこる体罰指導に注目した。現在、我々が知るような体罰指導は、しばしば戦前・戦中の軍国主義と結びつけて語られるが、果たしてそう簡単に両者を結びつけて良いものだろうか。そもそも戦前はスポーツへ参加する機会が（野球を除けば）上位階層に限定されており、スポーツ活動自体が特権的なものだった。また、敗戦直後はアメリカ占領軍によって武道教育が禁止され、民主教育の普及が強く求められており、課外活動で体罰指導を行うことは難しかったと思われる。

そもそも、昭和初期で中等学校への進学率が2割程度だったことを考えると、戦前のエリート学生たちに運動部活動で卓越化を狙う必要性は低かった。野球を除けば、運動部活動での実績を利用した進学者も少なかった。また、当時の体育教師に師範学校を出ていない下士官上がりの者がいたのは事実だが、彼らにスポーツ指導は期待されていなかった。進学や就職が関係するために、運動部活動で指導者による一方的な暴力が行われても、ひたすら耐えるしかない学生選手という構図は、むしろ1960年代後半から70年代の「スポ根」ブーム以降に一般化したと考えるべきではないか。実際、スポーツに「根性」という言葉が付きまとうようになったのは、1964年の東京オリンピックがきっかけであった。というより、現在のようにポジティブな意味で「根性」という言葉が使用されるようになったのが、1964年東京オリンピック前後のことだった（岡部ほか 2012）。

1960年代から1970年代の日本のスポーツ実践の変化を考えるうえで、高校への進学率の急激な上昇も背景として重要であろう。高度経済成長を背景に、中学卒業で就職する若者が「金の卵」ともてはやされていた一方、高校への進学率は1961年に60%を超え、1965年に70%、1970年に80%と急速に上昇していた（統計で見る日本）。この高校進学率の上昇は、運動部活動の大衆化としても理解することができる。1960年代は、サッカーをはじめとして社会人スポーツで全国規模のリーグ戦の創設が相次ぎ、野球以外でも運動部活動を経由した実業団への就職の道が拡大されたことも体罰指導拡大の背景と考えるべきかもしれない。また、全国で体育大学や体育学部の新設が相次ぎ、運動部活動の先に期待される進学先が増えたのも、1960年代のことであった。

こうして日本で「スポ根」指導が普及する環境が整備されると、追い詰められた選手が自殺する事件が生じて、次第に批判も増えていった。データベースで調べると、1970年代中盤以降に体罰批判論が増えているが、同時にその揺り戻しのように教育関係者から擁護論

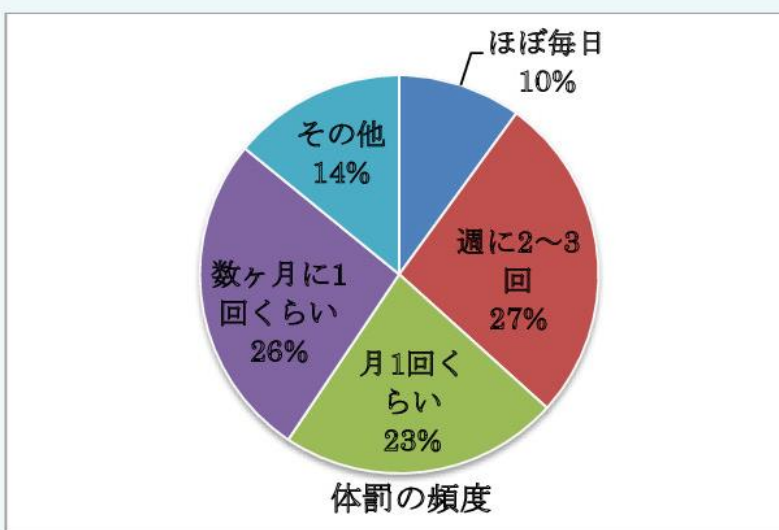
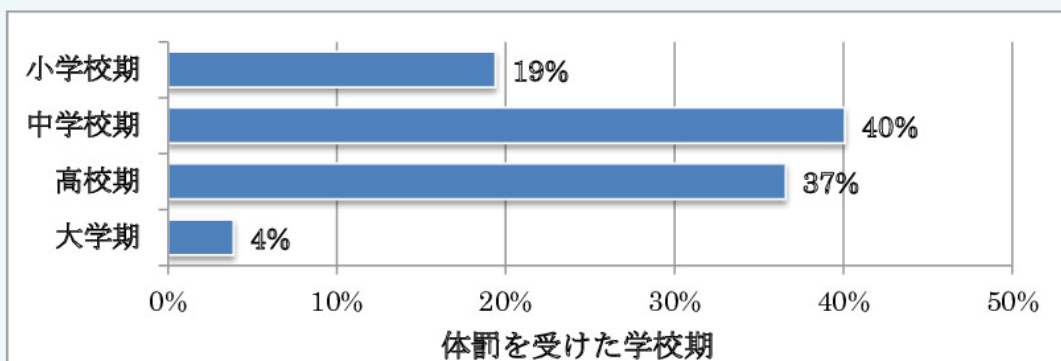
の主張も現れている（宮下 1975）。1980 年代に入ると、体罰指導はドラマ「スクール☆ウォーズ」等で感動の実話として流布される一方で、戸塚ヨットスクールでの死亡事件に対する裁判が世間をにぎわし、賛否両論の議論が展開されていた。

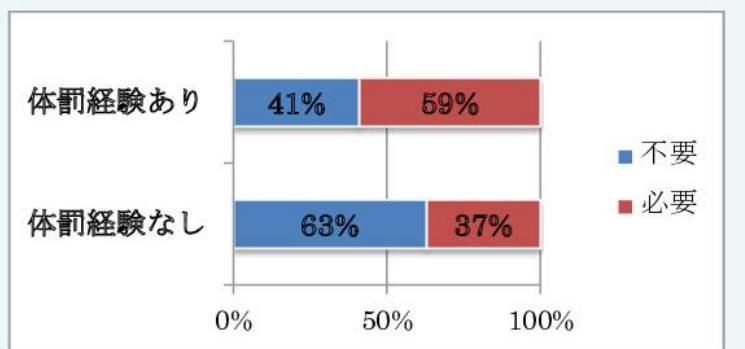
その後、1989 年に国連で子どもの権利条約が採択されたこともあり、体罰指導の擁護論は表立って主張しにくい状況になったが、大学生を対象としたアンケート調査（大学体育関連情報調査チーム 2014）等を見ると、日本の体罰指導は現在もなくなっていない。言説としても、散発的とはいえ擁護論が出版される他、昔の体罰話が YouTube 等で半ば好意的に語られ続けている。

さらに問題なのは、体罰指導を経験した者は、かなりの割合で自らも体罰指導を容認するようになることであろう（以下の調査結果を参照）。加えて、体罰指導を受けた人ほど運動部活動の指導者になりたがる傾向がある。

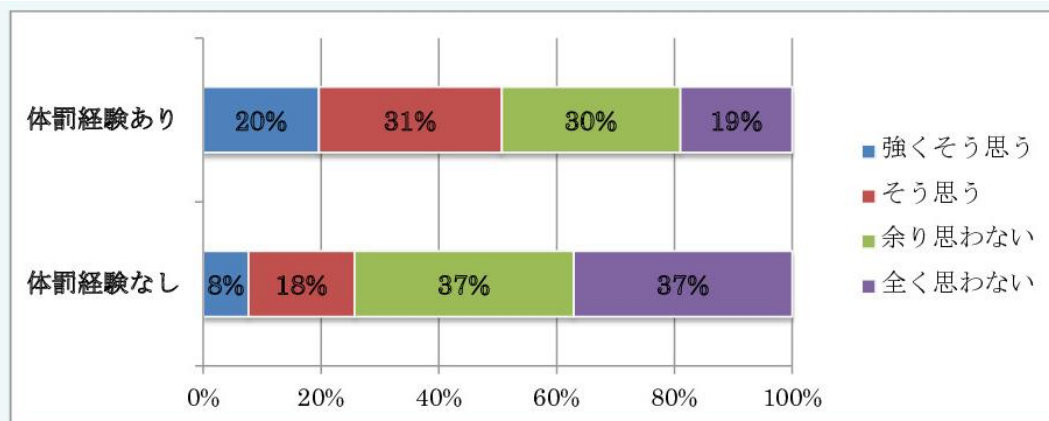
運動部活動等における体罰・暴力に関する調査（2013 年 9～10 月実施）

※運動部活動経験のある大学生 3,638 名の回答結果





運動部活動に体罰指導は必要と思うか？



将来、運動部活動の指導者になりたいか？

(大学体育関連情報調査チーム 2014)

そこから考えると、体罰指導を被害者として経験し、それによって成功したと信じる人々が、ある種の共同体を形成し、外部からの批判を遠ざける構造が存在するように思われる。そこで、体罰指導を支持する人々の共同体について、バーバラ・ローゼンワインのいう「感情の共同体 (emotional community)」論を手掛かりに考察することにした。分析の対象としては、1980年代から体罰指導の意義を強く主張し、現在も体罰容認論の代表者とされている戸塚宏が刊行した書籍を主な資料とした。

感情史研究と「感情の共同体」論の概要

本論に入る前に、ここで方法論の説明を行いたい。ローゼンワインとクリスティアーニがまとめたところによると、英米系の歴史学において「感情の共同体」論が成立する過程には次のような先行研究があった (Rosenwein and Cristiani 2018=2021)。

まず1980年代に、ピーター・スターンズとキャロル・スターンズは「Emotionology」を提唱し、社会構築主義の立場から「その時代に人々が実際にどう感じたのか」ということと

「その時代における感情表現の基準」を切り離した。そして、19 世紀のアメリカで流布された作法書の記述の変化から、感情の社会的管理が変化する様を示そうとした。

次に重要となるのは 2000 年前後に現れたウィリアム・レディの「感情体制 (emotional regime)」論と「emotive」の概念であった。レディは、感情を権力体制を解説する手がかりとし、権力を感情を理解するための鍵とした。彼はフランス革命期を題材として、当時の主流となる感情表現がどのように変わったかを示そうとした。しかも、感情表現が体制の変化に従属して変化するだけでなく、感情表現が人々の主体性を変化させ、それが社会体制の変化につながる可能性を認めていた。そうした感情表現の働きを彼は「emotive」と呼んだ。レディは、J・L・オースティンに依拠しつつ、事実確認的 (constative) と行為遂行的 (performative) の区別に加えて、両者の特徴を兼ね備えた「emotive」な表現が存在すると主張した。

これらの先行研究を踏まえ、ローゼンワイン (2006) は「感情の共同体」論を提唱した。それは、感情表現の規範について同一あるいは類似の評価を共有し、実践する人々のグループと考えられる。「感情の共同体」論は、レディの「感情体制」論をモデルとしているが、時代を支配する感情体制 (と対抗的な感情の避難所 *refuges*) という図式を認めず、大小さまざまな感情の共同体が一部重複しつつ共存する世界観から感情言説を捉えようとした。

ローゼンワインは、中世初期、メロヴィング朝 (6 世紀～8 世紀前半) のフランク王国をその研究対象としている。この時代、この地域に並立した感情の共同体は、いずれも古代ローマの感情表現をベースに、自分たちのスタイルを構築しようとしている点で共通点があった。そのローマ時代のモデルは、ヘレニズムとヘブライズムを折衷する矛盾を抱えたものであったが、メロヴィング朝下の感情の共同体も、その矛盾を継承しつつ、独自の解釈を加えることで、それぞれの「emotive」を展開していた。

この「感情の共同体」論で特に印象的なのは、教皇グレゴリウス 1 世 (540?～604 年) の言説を対象とした分析であった。ローゼンワインは (残された資料が少ない中世初期という時代背景があるものの) 社会的影響が大きい個人の言説を、ひとつの感情の共同体を構成するものとして取り上げていた。本報告で、日本の体罰指導擁護論を代表する人物である戸塚宏の言説を、その種の感情の共同体を抽出するための資料とするのは、その範に倣ったものである。

戸塚ヨットスクールの体罰指導

1940 年に生まれた戸塚宏は、1959 年、大学に進学した際、部活動としてヨット競技と出会った。その後、1975 年の沖縄海洋博記念「太平洋・沖縄・単独横断レース」で優勝し、ヨットマンとして名声を得た。1977 年、愛知県知多郡にヨットスクールを開設。当初はオリンピック代表を育てることを目標としていたが、登校拒否の子どもがスクール入所を経て「回復」したことが話題となり、非行や登校拒否に悩む保護者が「治療」のため子どもを預ける施設に変貌していった。

1979 年、登校拒否で入所した少年が死亡する事件が起きる。この事件は、戸塚に対する擁護論が背景となって慎重に捜査が行われた結果、1983 年に立件されることとなった。戸塚は 2002 年に実刑が確定し、収監された後、2006 年に出所したが、その間もコーチによってヨットスクールの経営は続けられていた。戸塚の出所後も数回、入所者の死亡事故が起きているが、スクールは現在も活動を続けている。

戸塚宏は、マスコミの激しい批判や実刑判決にも関わらず、体罰指導を肯定する姿勢を変えなかった。それどころか、独自の「脳幹論」を提唱し、彼の言うところの「情緒障害児」を治療する手段として体罰指導を支持し続けてきた。この「脳幹論」は、セリエのストレス理論やマズローの欲求段階説等を混ぜ合わせたもので、単純な精神論、根性論ではない。戸塚は人間の「本能（生物学的性質）」を、欲求段階説に倣って、①自己保存、②種族保存、③進歩創造、④価値取得の 4 段階に分けている（戸塚 1985：280-281）。戸塚に預けられた子どもたちは、不適切な家庭教育のせいで、①から④への発展段階をたどることができなかったと考え、一からやり直すために一切の自由を奪い、人間性を剥奪する。そして、体罰による恐怖で自己保存の本能を刺激し、戸塚が本来的と考える（性役割分業を含む）社会的な役割を再取得させることで、高度な段階へ進歩する道筋が開かれると考えていた。

戸塚の指導法には、彼が言うところの「本能（脳幹）を刺激し、活性化する」という目的のため、体罰を行う際に理由を説明せず、むしろ相手が恐怖を強く感じられるように理由なく暴力を振るうことが含まれていた。入所したばかりの者に、「ここはいままで住んでいた世界とは違うんだということをわからせておこうと、何もいわずに殴りつけ」るようなことも行っていた（戸塚 1985：207）。「私たちは、その子供たちの前に、言い訳をけっして聞かない他人として立ちはだかるのです」と戸塚は言い、親の躾の代わりではなく、自身の子どもには決してできない厳しさを保つことがその指導法の要点であると語っていた（戸塚 1985：116-117）。

このような「脳幹論」は、率直に言って疑似科学と呼ぶべきものではあるが、石原慎太郎のような右派の論客に支持されただけでなく、最近も一部の学会で講演を依頼されるなど、軽視できない影響力を持っている（戸塚・朝田 2015）。実際、YouTube 等で体罰肯定論や容認論が展開される際、戸塚の「脳幹論」そのものではないとしても、聞きかじりの医学知識や疑似脳科学から立論が行われることは少なくない。

自然科学から生み出される科学知を日常の実践に適応する際には、慎重な条件コントロールが不可欠であるが、恣意的な適用をすれば本来の主旨とは異なる理解を権威づけてしまう危険がある（西山ほか 2013）。体罰指導に関して、日本のスポーツ指導者の一部にはその有効性が強く信じられているが、それは日本のスポーツ環境がもたらした特殊な反応と考えるべきではないだろうか。実際、イギリスと日本のサッカーチームの比較研究で、体罰を含めた指導を行った場合と言葉による指導を行った場合で、コーチの指導に対して選手がどういう印象を持つか質問紙調査を行ったところ、イギリスでは体罰を含めた指導が行われるとコーチの指導が受け入れられなくなるのに対して、日本では体罰指導があつて

も選手の心象に悪影響は少ないことが示されていた (Hagiwara and Wolfson 2013)。

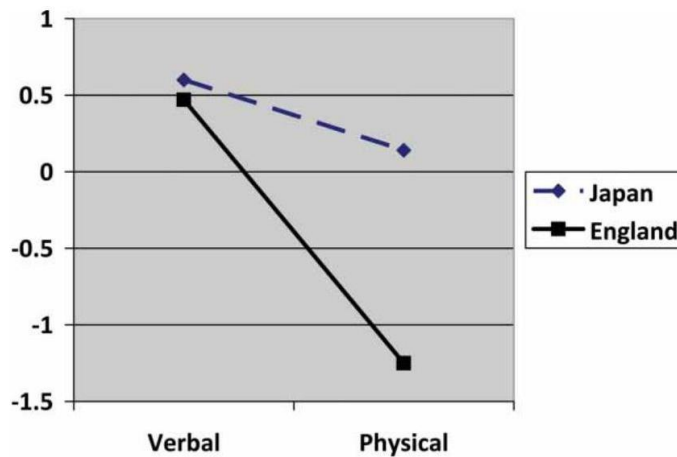


Figure 1. Ratings of acceptance of coach (high scores = high acceptance).

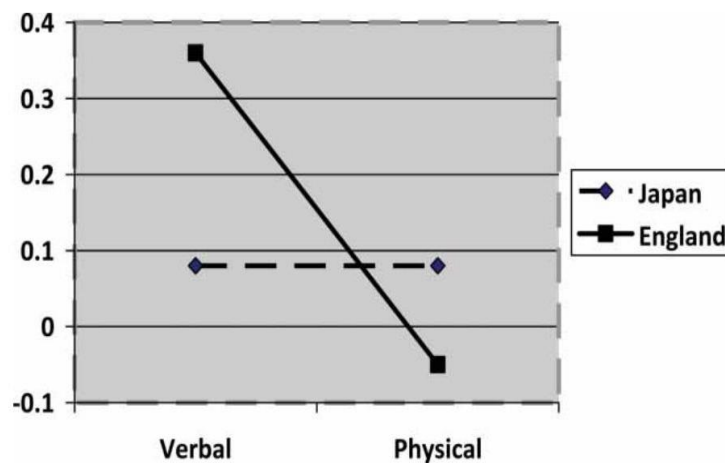


Figure 2. Ratings of popularity of coach (high scores = high popularity).

(Hagiwara and Wolfson 2013 : 63)

「脳幹論」に見られる戸塚の心理操作は「プラシーボ効果」で目標を達成できてしまうところに落とし穴がある。他の世界から隔絶された閉鎖空間で、人権をはく奪して行動を規制すれば、別に体罰を用いなくても心のありように永続的な変化をもたらせることは過去の洗脳に関する研究から明らかである。それでも、子どもの問題を解決できなかった保護者が、最後のよりどころとして戸塚ヨットスクールに子どもを預け、時には「結果」が出てしまったことは、戸塚が体罰肯定論を保持する力となってきた。

とはいえ、依然として体罰指導を肯定する戸塚であっても、今ではそれが時代に合わなく

なりつつあることを認め、ヨットスクールでの体罰指導をやめたことを告白している（木崎 2021）。同様に、体罰指導を当然視してきた日本のスポーツ環境も、以前とは大きく変化しつつある。これまでは、運動部活動での実績が手堅いキャリアにつながることで指導者への従属を強めてきた。それに対して、実業団チームが減り、マイナースポーツでもプロとして活躍できる場が増えた一方でセカンドキャリアは自分で切り開かなければならない現在、ほんの数年指導を受けるだけの相手に生殺与奪の権利を委ねることは不合理となってくる。理に適った言葉による指導で選手の成長を促すことができない指導者は、少なくともエリート層の指導において、今後は環境変化の圧力によって減少が予想される。（同時に、行政が要請する通り、競技・大会志向でなくレクリエーション志向の運動部活動が増えれば、それだけ体罰指導の減少は拡大するだろう（スポーツ庁・文化庁 2022：11）。）

まとめ

日本のスポーツの場にはびこる体罰指導に対しては、特に 2013 年以降、数多くの論考が示されてきたが、それをなくす効果的な提案ができたとはいえず、現在も根絶できていない。時代環境の変化によりエリート層が集まる学校やチームでは将来的に減少が期待できるとしても、ボランティア指導者が支える中堅レベルの学校やチームでは、指導者の競技愛を頼りに存続しているからこそ体罰指導が残るかもしれない。

本報告は、体罰指導を肯定する感情の共同体の作動原理の一端を明らかにすることで、当該共同体のメンバーに他の世界と価値観をすり合わせてもらうための糸口を開くことを狙いとしたものであった。その糸口として、疑似科学的な感情利用の言説が注目された。そうした言説に対しては、スポーツ先進国で、心のありようを認知行動療法の応用で整えるメンタルトレーニングが一般化している事実を知らせるなどして、疑似科学を上塗りする対応が考えられる。他者を悪魔化したり、差異を過大視するのではなく、主張に耳を傾け、その要諦に応じた処方箋をもたらす試みによってこそ、時代遅れとなり、孤立しつつある感情の共同体をより大きな共同体に包摂し、根強くはびこる問題を解決に導くことができるのではないだろうか。

※ 本報告は、第 95 回日本社会学会大会（2022 年 11 月 12 日）で行った研究発表の原稿を加筆、修正したものである。また、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）による研究課題「情動と身体的コミュニケーションが開く公共性——公共圏の再生に向けて」（研究課題番号：20K02169、研究代表者：時安邦治）の研究成果の一部である。

参考資料

大学体育関連情報調査チーム（北徹朗・小林勝法・高橋宗良・中山正剛），『運動部活動等における体罰・暴力に関する調査報告』，公益社団法人・全国大学体育連合，2014 年。

Hagiwara, Haruka and Wolfson, Sandy, “Attitudes towards soccer coaches’ use of

- punishment in Japan and England: A cross-cultural study,” *International Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11(1), 2013.
- 上之郷利昭, 『スパルタの海——甦る子供たち』, 東京新聞出版局, 1982 年.
- 木崎伸也, 「戸塚宏が「体罰」をやめた理由: 戸塚ヨットスクールが力を入れる「0 歳児教育」とは」, 『JB press』, 2021 年. (2023 年 2 月 16 日閲覧)
<https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/65573>
- 宮下清, 『体罰のすすめ』, 光風社書店, 1975 年.
- 西山哲郎 (編), 『科学化する日常の社会学』, 世界思想社, 2013 年.
- , 「体罰容認論を支えるものを日本の身体教育文化から考える」, 『スポーツ社会学研究』 22 (1), 2014 年.
- 岡部祐介・友添秀則・春日芳美, 「1960 年代における「根性」の変容に関する一考察: 東京オリンピックが果たした役割に着目して」, 『体育学研究』 57 (1), 2012 年.
- Reddy, William M., *The Navigation of Feeling: a framework for the history of emotions*, Cambridge University Press.
- Rosenwein, Barbara H., *Emotional communities in the early Middle Ages*, Cornell University Press, 2006.
- Rosenwein, Barbara H. and Cristiani, Riccardo, *What is the history of emotions?* Polity, 2018. (伊東剛史ほか訳, 『感情史とは何か』, 岩波書店, 2021 年.)
- スポーツ庁・文化庁, 「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」, 2022 年.
- 戸塚宏, 『孤独の挑戦』, 大陸書房, 1983 年.
- , 『私が直す!!』, 角川書店, 1985 年.
- , 『敵は脳幹にあり』, 研光新社, 1988 年.
- , 『教育再生!』, ミリオン出版, 2003 年.
- , 『本能の力』, 新潮社, 2007 年.
- 戸塚宏・朝田隆, 「私の脳幹論」, 『精神医学』 57(2), 2015 年.
- 戸塚宏・田母神俊雄, 『それでも体罰は必要だ!』, ワック株式会社, 2010 年.
- 統計で見る日本, 「学校基本調査 年次統計 進学率 (1948 年～)」 (2023 年 2 月 16 日閲覧)
<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147040>

《中小路徹（会員・朝日新聞編集委員）のコメント》

この1月は、大阪市立桜宮高男子バスケットボール部主将が、顧問から受けた暴力などを理由に自死したことが明らかになったことと、女子柔道日本代表の監督・コーチらが選手たちに暴力・ハラスメント行為をしていたことが発覚して10年になります。

いまなお、暴力的指導が次々と明らかになりますが、その全体像がどうなっているか、現在地を知ってこそ、今後の具体的な対策課題をたてることができます。そこで、朝日新聞社として、高校までにスポーツをしていた大学生639人（5大学の協力）から有効回答を得たアンケートを実施し、2013年5月に報じたアンケート（3大学協力、運動部員510人から有効回答）と比較しました。

主な結果は次の通りです。括弧内は2013年の数字です。

■小、中、高校時代に指導者から体罰を受けましたか？

- ① はい 17% (33%)、② いいえ 78% (59%)
- ③ 自分は受けなかったが、別の選手が受けた 5% (8%)

この結果から、現場の暴力は減っていると言えます。

■（体罰を受けた人に）指導者の体罰をどう感じましたか？ どんな影響がありましたか？（複数回答可）

- ① 指導者の愛情を感じた 20% (38%)
- ② 本当に自分のことを考えていると感じた 26% (46%)
- ③ 競技力向上に役立った 16% (27%)
- ④ 気持ちが引き締まった 36% (60%)
- ⑤ チームのため体罰を受けてもしょうがないと感じた 17% (21%)

■指導者の体罰をどう感じましたか？ どんな影響がありましたか？（複数回答可）

- ① 指導者の目を気にして練習、試合をするようになった 44% (18%)
- ② なぜ体罰を受けなければいけないか、理解できなかった 22% (10%)
- ③ 反抗できない状況で、やり方が汚いと感じた 19% (7%)
- ④ そのチーム、またはその競技をやめる一因になった 8% (1%)

これらの結果から、体罰への肯定的な影響が減り、否定的な影響が増えたといえます。

■指導者と選手の信頼関係があれば、体罰はあってもいいと思いますか？

- ① そう思う 5% (28%)
- ② どちらかといえば、そう思う 9% (34%)

- ③ どちらかといえば、そう思わない 16% (16%)
- ④ そう思わない 66% (17%)

■スポーツを教える側になったとして体罰を使うと思いますか？

- ① 絶対に使わないと思う 90% (51%)
- ② 時と場合によって使うと思う 7% (43%)
- ③ 使うと思う 0.2% (2%)

これらの結果から、体罰容認論は激減しているといえます。

ただし、「体罰受けた」のうち

- ① 「体罰あっていい」 13% (全体 5%)
- ② 「どちらかといえばあっていい」 15% (全体 9%)
- ③ 「どちらかといえばそう思わない」 20% (全体 16%)
- ④ 「そう思わない」 49% (全体 66%)

となっており、「負の連鎖」は依然みられるといえます。

また、「考えに合うものに○をつけてください」の質問では、次のような結果も出ています。

- ① 以前よりも体罰問題は改善されていると思う 36%
- ② 体罰は改善されたが、暴言や威圧的な指導は改善されていないと思う 34%
- ③ たたかれたり、蹴られたりしたことはあるが、体罰を受けたとは思わない 3%

この結果から、暴言、威圧的指導が根強い課題として浮かびます。体罰への認識がいまだ薄い層がいることもわかります。

上記の結果から、次のことがいえると考えます。

指導現場の暴力はある程度、減っています。つまり、この10年間の努力は実っており、根絶は「道半ば」ではあるが、「道半ばには」来ているともいえます。また、反暴力の啓発も進んでいて、最近、発覚しているのは訴えやすくなり始めた反面だといえます。

一方で、わかりづらい体罰、暴言、暴力的指導はいまだに啓発が進んでいません。暴力根絶への啓発は、こちらの方に比重を移すべき第二のフェーズにきていると思います。

《第 24 回セミナー》

多様性とひとつになることの裏腹

小田伸午（会員・関西大学名誉教授）

杉本厚夫（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）

はじめに

子どものスポーツは、1976 年モントリオール五輪の女子体操で、若干 14 歳のナディア・コマネチが満点で優勝したことで注目され、低年齢からひとつのスポーツを専門的に行うということになりました。つまり、子どもたちは多様なスポーツ経験をしなくなったのです。

また、チームスポーツでは、それぞれのプレイヤーの個性を重んじ、その多様性を認めることが求められています。しかし、一方でチームとして一つにまとまることも求められます。

このように、多様性と一つになることの裏腹な関係が存在します。このパラドックスは如何に乗り越えることができるのでしょうか。

長年、One for All, All for One（ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン）の理念を持ったラグビーに関わって研究されてきた小田伸午先生に、このなぞ解きをしてもらいます。

1. 子どものスポーツの専門性と多様性について

杉本「今日は私が質問する形で進めさせていただきます。ナディア・コマネチの話ではないのですが、小さい頃から専門的にひとつのスポーツ種目をするという子どもたちがすごく多くなってきています。多様なスポーツを経験しなくて、ひとつのスポーツをしていくことの功罪について、お教えいただけますか」

小田「どちらも功であり、どちらも罪であるような気がします。私の専門の神経科学的、スポーツ科学的な領域でいえば、人間の神経系、特に中枢神経の発達が著しいのは、5 歳から 10 歳ぐらいまでです。そこから 15 歳ぐらいまでにかけて、発達はやや鈍りますけれども、2 番目に著しいポストゴールデンエイジ時代です。スキヤモンの発達曲線によれば、この 15 歳ぐらいまでに神経系の発達を促すようなトレーニング刺激を与えるのが一番理に適っていると言われています。神経系が著しく発達する時期に、ナディア・コマネチは体操だけやっていたようにみえますが、体操 6 種目をやっているのです。つまり、基礎運動として跳び・走り・投げのあらゆるものをやったと思います。ひとつの競技種目であっても非常に多彩な運動系技術系を要する体操であったということに注目しないと、外れたことを言ってしまうかねえないと思います。それがまず第 1 点です」

小田「もう一つは、人間はひとつのことだけにとらわれると、そこから真実を得ることができないというようなことはないでしょうか。野球の選手が、ある日、柔道をやったときに、野球のピッチャーとキャッチャーとバッターの3人の関係は、レフリーと柔道で対峙している3人の関係とそっくりだったと思ったそうです。そういうところから何か悟ったようで、練習方法を変えたそうです。多種多様な競技の経験から得られたことを、自分が取り組んでいるスポーツへ持ってくることってというのは、新たな真実を見出すことになるのではないかと思います」

杉本「確かに。僕らは相対化と言うのですが、そのものの自体を疑ってみること、あるいは違ったことをしないと、そのこと自体の価値が見えてこないということがあります。異質なものをもってこないと全体像が見えない。そういうことでいいのでしょうか」

小田「コメンテーターばかりやっていて、ナビゲーターをやらないと、ナビゲーターの気持ちはわからないですね」

杉本「社会化という概念からいっても10歳というのがターニングポイントです。10歳学会を作ろうかと言われていたくらいで、社会的存在であるという自己を認識するのは10歳までにどれだけ多様な人間と関わってきたかで、そのアイデンティティが形成されるとも言われています」

小田「小学校の低学年、中学年までですね」

杉本「日本のスポーツ界では、『継続は力なり』ということで、何か一つのことを続けてやっていくことが良いとされています。だから、他のスポーツ種目に変わったら『あいつはだめだ』と批判される傾向があったような気がします。これで思い出すのは中道貴之さんです。ご存知ですか」

小田「100メートルとラグビーの選手ですね」

杉本「ラグビーのウイングをやっていたのですが、100メートルを10秒1で走ったので、大学に進学するときにどちらかを選べと言われて、陸上を選ばざるを得なくなってしまって、ラグビーをやめてしまったのです。僕は両方やっていればよかったのと思ったのですが、そうさせてもらえなかったようです。今、WBCに大谷翔平がピッチャーとバッターで出ていますが、最初は批判されましたよね。そういうことが許されないスポーツの世界があったのでしょうか」

小田「おおよそ大正の初期にラグビーが日本に伝わりましたが、そのころは、ラグビー選手はいなかったのです。陸上競技の 100 メートルの速い選手をウイングにして始まったのです。面白かったと思いますよ。ラインアウトのボールを取るのに、バスケットボールの背の高い選手が出てきて、それをフォワードの第 1 列の柔道・相撲選手がゴリゴリ押して、ぱっとボールを出して、100 メートル 10 秒 0 がトライする。そういう豊かな多様性のあるなかで始まったのですけども、段々と固定化の方向へ流されていく傾向がラグビー界にもありました」

杉本「『この道一筋』といえば焼き肉屋のコマーシャルみたいですが、剣道、柔道などでいわれるところの道精神の価値観にとらわれている感じがしないでもないのですが、ラグビーはどうでしょうか」

小田「ラグビーは違っているから面白いのだというのがあります。ある OB が選手を指して言うのです。『見てみろ、背が小さいだろう、あれはスクラムハーフ。フォワードがスクラムボールを取ったあと、でかい、重たい彼らは前へ前へ出て、さっと一瞬の隙を見て球を出して、そのボールを左にさばくと見せて、右へ走り込んできたもう一人の相棒のスタンドオフにパスをする。俊敏性にあふれていて、前のフォワードとは全然性質が違うのだ。多様な性質が組み合わさってできるのがラグビーの特徴だ』と教えてくれます」

杉本「そういえば、ラグビーの人はポジションによって体格が違いますね。バスケットボールやバレーボールなどは、身長 190 センチ以上の人たちが多く、全員がほとんど同じような体型になっていますよね」

小田「東大ラグビー部の 100 年記念パーティーがあったときに、年のとり方はいろいろですが、体型もいろいろです。『まだ、こんな LL サイズの服を着ているのか』と細身の人が太身の僕らをからかいます。細身も太めも、背の高い人も低い人も、遅いのに遅いなり役どころがあって、ぶちかましにスピードはいらないのだと、パワーと体の使い方だと教わりました」

杉本「ラグビーはもともと、多様性を前提としているスポーツというふうに考えたらいいいのではないかと考えています。それは、ポジションによって体格が違うということに表れていますね」

小田「体重制を設けてはどうかという議論はありました。京大ラグビー部のある先輩は、ラグビー協会に 85 キロ級以下の大学ラグビーリーグを作るようにと働きかけたのです。

そうしたら、京大、東大が一番になると。でも、ラグビーはそういうものではない。多様性を前提にしているからラグビーなのだということになりました」

2. 役割の固定化と流動性について

杉本「ポジションによって体格が違うというのがあるのですが、そのポジションの役割をきちっと果たすことが、チームがひとつになるというふうに言われています。その点についてはどう思われますか」

小田「ラグビーは1番から15番までポジションがありますが、役割と背番号が一致して、それがフィックスしてしまったところが問題です。スクラムを組んで、ボールを出して、最初の一次攻撃だけでトライが生まれたら、その任務だけでいいのですが、トライが取れなかったときにもう1回攻め直さないといけない。その時、一番、ボールのそばにいるのはバックスなのです。バックスは強い当たりで相手をはねのけて、集団で押してボールを残す。スクラムハーフはまだ走ってこられないから、バックスの器用な選手がパスして、そこに走り込んできた5番とか4番のフォワードがバックスラインを作って、二次攻撃をします。このようにポジションが変わっても違う役割ができる能力が必要だと、世界のラグビー界でいわれるようになった時代がありますね」

杉本「この前のラグビー・ワールドカップを見ていて、フォワードが結構トライをしたので、びっくりしました。昔は、フォワードはボールをキープするだけの役割で、そのボールをバックスにまわして、バックスがトライするというパターンしか見たことがなかったのですけれど」

小田「結婚前に私が頑張っているところを見せようと思って彼女(妻)を試合に連れてきて、終わった後、近寄っていったら、『あんた、どこにいたの』と訊かれました」

杉本「フォワードだといつもぐしゃっとなっているから見えないわけですね。これまでのように自分のポジションの役割を果たしていたらいいというのではなくて、役割を変わっていくという流動性みたいなものがすごく求められるようなラグビーになってきたのではないですか。流動的に動いていくことが、逆にひとつになるということかなと思うのですけど」

小田「フィックスして固まると、動きがとれない状態になります。そうではなくて、どのタイミングでも必要なプレイを選択して、間違いなく、その場にいる4, 5人が的確な判断で同じピクチャーを見て、さっと対処して無駄なことをしない流動性のあるチームが求められています。例えば、日本のワンリーグの埼玉のワイルドナイツ(前のパナソニックですね)は今年は無敗できている。何をやっても上手にできて、何をやらせてもある意味中途半

端のきらいがある。だけど、何をやらせても無駄がない。今の日本はこういうチームが強いのだと解説者がおっしゃっていました。」

杉本「中途半端というのは悪いように思っていましたけど、流動性があるというのもひとつの中途半端なのかもしれませんね」

小田「教育でも平均的な人間を作ってはいけないという考え方でしたけど、平準化した人間が無駄なく、無理なく活躍する時代がコロナ以降くるのではないですか」

杉本「そういう意味では、今の日本では、ポジション、役割を変わりにくい社会になっていると思います。僕は遊びの研究をしているのですが、遊びは役割を交代することで相手のこともよくわかるし、ちがう楽しみを味わうことができます。つまり、役割の流動性のなかに遊びの世界は作られているのですが、そういうものがスポーツの世界からなくなってきています。専門性、専門性と言われると」

小田「鬼ごっこの醍醐味は鬼が切り替わる場所ですね。今、安全地帯にいたのに、すぐ隣が鬼になって、つかまってしまいますから」

杉本「流動性はまとまりがないように見えますけど、実はまとまりがあるというパラドックスがあると感じています」

小田「流動性でひとつだけ言わせてください。研究所のコラムのなかで書かせていただいたのですが、赤ちゃんは歩くことを覚える前に立つことを覚えるのです。立つときに、何をやっているかという、つま先とかかとで荷重を繰り返して、動的な揺らぎを覚えているのです。赤ちゃんはかかとを踏んで前に行きます。つま先は踏まないのです。体のなかで立った状態の一番後ろはかかとですから。重心を前に押し出すには、体の一番後ろのかかとを踏まないといけないのです。崖っぷちにたって、前から背中の方に向かって突風がふいたら、多くの大人は落ちないようにつま先を踏みますと言います。でも、つま先で踏むとみんな落ちてしまいます。座っていて立ち上がる時にかかとを踏まないで前へ出られません。これを赤ちゃんは無意識で覚えるのです。大人が頭で考えると逆をやってしまうというのも気をつけないといけないですね」

杉本「なるほど。揺らぎ、曖昧性みたいなものが、まとまりには必要だということですね」

小田「これを福岡伸一さんは動的平衡と言っています。動的なことが平衡につながる。たえず動いていることが平衡につながると」

杉本「このことについてもっと詳しく知りたい方は、研究所のホームページでコラムをご覧ください。

3. One for All, All for One (ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン) ,No Side (ノースайд) という理念について

杉本「ちょっと話題を変えますけれども、ラグビーのひとつの大きな理念である One for All, All for One というのは今日のテーマである「多様性とひとつになることの裏腹」の理念であるかと思うのですが、実際にラグビーでは、この理念をどのように実現しようとしているのかということをお話いただければと思います」

小田「これは理屈でいうと難しいので、日常的な言い方をすると『みんなでやるんだよ』。その一言ですね。私も現役のころ、早稲田大学との試合でトライをさせていただきましたけど、前半五分五分で試合が進み、そのとき、最後に私の手にボールがきて、グラウンドにつけてみたらトライだった。ラグビー未経験で入部した私はトライの仕方を教わっていなかったもので、どうやってグラウンディングするかわからないので、一瞬、慌ててしまいました。すると、みんなでだまって体を寄せ合って、自陣に戻るときの幸せといったらなかったです。俺がトライしたのだというガッツポーズはしなかったです。One for All でみんなが私のところへ駆け寄ってきて、ひとつになっている気持ちが、試合を見に来てくれた、OB、先輩たちを感動させたそうです。ラグビーはそういうところがあるのです」

杉本「ゲームでは、そういうことだと思いますけど、ラグビーで子どもたちを育てていくという面では、何か One for All, All for One というラグビーの理念でやっていращやるということはあるのでしょうか」

小田「ラグビーは小学生から大学、社会人までずっとつながっていますから、いろいろなスポーツをやり、いろいろなポジションをやり、いろいろな人に指導され、受け継がれて、みなさんのおかげをもって、一人の選手が育っていく。これが、日本ラグビー協会が目指している方針ですね。ロングスパンのオールと、ワンスパンがつながっていくというところが、ラグビーのある種の捉え方ではないでしょうか。そこまで One (ワン) と All (オール) を捉えると、ちょっとうがった見方すぎるかもしれませんが」

杉本「今回、リーグワンというのができたのですが、JリーグやBリーグのようにプロ化の道には進めなくて、どこかワンになっていなかったのではないかという見方もあると思います。プロ化できなかった要因というのは、One for All, All for One という面からはどのようにお考えですか」

小田「プロ化というのは僕ぐらいの世代より上の人は好ましくないと思っています。ラグビーはアマチュアのスポーツだと。仕事を5時までやって、ワイシャツ、ネクタイを外して、着替えて、夜2時間チーム練習をやって、個人練習もやって、みんなでちょっと一杯やって、それで、また次の朝6時に起きてと。そういうところが、日本では企業スポーツであると新日鉄釜石の選手が言っていました。先ほど、埼玉ワイルドナイツを思わずパナソニックと言ってしまいましたが、埼玉・熊谷という地域のカラーは全国的にはまだしみ込んでいません。でも、企業のカラーが出ていたとしても、企業がその地域にしみ込んでいる性質は特徴的ではないでしょうか」

杉本「基本的には企業と地域が一体化していることが必要だということですね」

小田「神戸の人たちの神戸製鋼への思い入れはなかなかすごいものですよ」

杉本「だから、その企業が地域にどれだけ根ざしているかということで、企業スポーツが本当は地域スポーツになっていて、ヨーロッパのようなクラブチームというふうな考え方がラグビーのなかにあるというふうに考えてもいいのでしょうか」

小田「ヨーロッパの地域クラブの歴史と、ラグビーのスタートとは違うでしょうけれども、地域の祭りと地域の企業が一体になっているという感じはなきにしもあらずですね」

杉本「僕にいわせれば、地域の人たちが寄付して何かチームを作っていければいいかなと思うのですが。だから企業もコマーシャルのためのスポンサーでなく、寄付してパトロンとして関わってもらえれば、その地域のなかでひとつのあり方みたいなものが見えてくるかなと思ったりするのです」

小田「それもひとつありますね。マラソンもそうやって発展しているようですから」

杉本「チャリティとか、クラウドファンディングという言葉が出てきますけれども、そういったものでチームができていくというのが将来のスポーツのあり方だと思います。地域貢献(CSR)としてスポーツを支えるという企業の論理があればいいのかなと思っています。そういう意味で、プレイヤーだけでなく、地域の人たち、スポンサーなどを繋いでいくような One for All, All for One というひとつの理念を持っているのはラグビーの強みかなと思います」

小田「審判が一緒に入っているというのは、私が現役時代の対抗戦グループや定期戦もそう

ですが、試合が終わったら、アフターマッチファンクション（レセプション：交流会）があって、必ずその日笛を吹いて頂いたレフリーが招待されます。そこで、今日の試合の講評をお願いします」

杉本「ラグビーは試合後の交流が特徴ですね」

小田「審判の方は必ず手を差し出して握手していただきます。『今日のキミのスクラムは、僕は吹きづらかったよ、独特の角度で入るのだから、キミは』というプレイの話にもなります。忘れられないですね」

杉本「ノーサイドという発想がきちっとあるということですよ」

小田「勝った人があれば、負けた人がいる。監督さんが私のところへきて『今日は珍しく君らが勝ったが、有頂天になってアフターマッチファンクションで自分たちだけでドン騒ぎするなよ』と。『戦った相手と交流してラグビーを学んだ。いつも君らが負けているから、勝ったとき、今日のファンクションはどうしたらいいか考えよう』と。そんなことも教わりましたね」

杉本「この前のセミナーで朝日新聞の中小路徹さんからご紹介いただいたのは、子どものサッカーで、ハーフタイムに両チームが集まってミーティングをする大会があるということでした。お互いに良いところや課題を言ったり、アドバイスしたりする。もう完全にノーサイドですよ。サッカーを追求する一人として、みんなで意見を言い合う。そのときにチームのサイドはない。そんなことがラグビーでは日常的に行われているということですよ」

小田「ノーサイドというのは、日本のラグビーが言い過ぎるのだと思われているのですが、今の世の中の状況を見ると、それでいいくらいですね。戦争のように見えるラグビーが平和を愛する男たちの集まりであるといわれます。それは相手をリスペクトしているからです。埼玉ワイルドナイツの監督にいわせると、それはアドマイア（賞賛する）だそうで、リスペクト（尊敬）ではないそうです。相手がこういうふうに出てきたら、俺たちはこうしないと絶対勝てないぞと、その相手のすごさと自分のもろさを知っていることをリスペクトというそうです」

4. 意思決定の多様性と画一性について

杉本「ところで、私は2015年のラグビー・ワールドカップの南アフリカ戦に日本が勝ったときの意思決定のことが非常に印象に残っています」

小田「ペナルティゴールを狙って入れば同点で、フォワードの連中が『同点のためにやってきんじゃないだろう。俺たちが勝たねば誰が勝つんだ。スクラム組もうぜ』と南アフリカに対してスクラムを選んだ。これがどんなにすごいことか、世界がびっくりしました」

杉本「そうですね。エディ・ジョーンズさんはペナルティゴールを狙えと指示したのに、プレイヤー自身がトライを選択して、それが成功した。まさしくトライ（挑戦）したわけですね。それが世界の称賛を浴びたということです。ゲームの勝利よりも、ヘッドコーチの指示に従わずに、自分たちで意思決定したというのは大きな意味を持っていると思います。1人の人が決めて全ての人がやるのではなく、みんなが決めるという意思決定の多様性みたいなものがラグビーに芽生えていると見ていいのでしょうか」

小田「ローカルの状況を一番わかっている1人か2人。そこにゲームキャプテンがそばにいれば、その3人でチームの動きが決まり、さっと伝わる。そういうシステム化ができています」

杉本「現場の判断ですよ。それは今の日本のリスクマネジメントからいって、一番欠けているところだと思います。この前、東京の地下鉄で火災があったとき、緊急で電車をホームに止めたのですが、ドアを開けていいかどうかという指示が上から来なかったものですから、みんなが窓から出たということがありました。現場の判断が許されない、現場で意思決定ができないことがリスクマネジメントの面で非常にまずい状況になっているのではないのでしょうか。今、おっしゃっていた現場の判断が重視されてきたというラグビーの世界は、すごく面白いなと思って見ているのです」

小田「ボールがあったところの現場に近い人の判断もあれば、その反対の真横の60メートル離れた逆サイドのウイングのところにいた人が、キックパスを蹴ればトライになるという判断をすれば、そこから指示が出ます」

杉本「それぞれのみんなの考えが意思決定に反映されたということですね。ワールドカップでスクラムを選んだという現象は、僕はスポーツ界にとってイノベーションだったと思います」

小田「忘れないでしょうね」

杉本「歴史的勝利といいますけれど、僕は、その意思決定したことが歴史的勝利だと思います」

小田「後日談があって、あるラグビー関係者に聞いたら、エディ・ジョーンズがあいつはわかっていない、俺の言った通りにやらないとダメだって、言ったとか、言わなかったとか。『譲れないくらいの強い情熱と知恵を持って指示を出しているのだと。それを破ってこそ今回のジャパンの勝利は、俺は100%値打ちがあるとは言えないけれども、選手には賞賛を送る』と。これはどう見ますか」

杉本「僕は、それはエディ・ジョーンズの懐の深さというか、逆に日本のラグビーを育てたと思います。プレイヤーそれぞれの自己判断を引き出すために、自分（エディ・ジョーンズ）の判断を乗り越える壁をあえて用意したのではないかなと思います。自己判断によるミスを怖がって挑戦しない日本のスポーツを変えたかったのではないのでしょうか。今までの日本のラグビー、他のスポーツを見ているミスをするなという指導の仕方が多かったのではないかと思います」

小田「合言葉がノーミスでいこうというのが口癖ですよ。エディ・ジョーンズはそれが日本に来てもっともがっかりしたと、いろいろなところで言っていますよね」

杉本「当時、日本代表のメンタルコーチをしていた荒木香織さんが言っていたのですが、選手がミスをしたときに『ごめんなさい』といって謝るのが不思議でしかなかったと。誰に謝っているのだろうと。そうじゃなくて、ミスをしたときになぜミスをしたのか、パスはもっとこうくれというふうに相手と話すことが必要なのに、『ごめんなさい』と言ってしまふ。これまでの指導のなかで上位下達的に、ミスするなと言った人に謝ることが習慣づけられていたので、そこから変えないといけないと、荒木さんは思ったそうです。そういうミスをしたときに、どうするかということが指導されていないというのがスポーツの世界では多くあるのではないかなと思います」

小田「ミスがあると却ってチャンスになることを追求したチームがありますね。神戸製鋼の7連覇の最後の3年ぐらいですね。平尾誠二さんが基礎を作って、キャプテンを大西に任せました。『パスはワンバウンドで放ったときにチャンスで、あれはミスではないと。ワンバウンドで放ったときはどこへいくか分からないから、相手の足が一瞬、止まるだろう。受けるほうが止まっていけないだろう、そこに差が出るのだ』と。発想が逆転していますよね」

杉本「相手にミスだと思わせておいて逆手にとる」

小田「相手はチャンスとってしまいますね。ミスった瞬間に球をとろうとして4、5人が遮二無二になってボール1点にめがけて、それをぱっと散らすのですよ。待っていましたと」

杉本「ミスというものをミスにしない。チャンスに変えていくという指導は全然なされていなくて、リカバリーのほうが大事なのに、ミスしてはいけないということで緊張して、逆にミスが連発するということがよくありますね」

小田「ミスというのは人間の勝手な解釈で、自然現象がそこにあるだけです。人間という心と体を持ち合わせた 15 人対 15 人でスペースをめがけてボールを送ったり、そこに、人が思わぬところに入り込んで肩にふれてこぼれたり、全部自然現象です」

杉本「思い違いがあるのは当たり前だという発想ですね」

小田「安定感はないのです。いいときはがぜんいい。世界の強豪にもあわや勝つまでいきましたが、最後に勝てないのはそういうところですね」

5. 国籍の多様性と文化性

杉本「最後にお聞きしたのですが、ラグビーの特徴というのは、日本代表に多国籍の人たちが入ってチームを構成していますけど、この特徴はどう解釈したらいいのでしょうか」

小田「日本だけの特色だけでなく、ウェールズにいったときに、イングランド代表で出ているウェールズの選手がいるということを聞きました。その選手はウェールズには、自分のやりたい勉強を教えてくれる専門家がいなくて、イングランドの大学でラグビーを続け、イングランド代表になれた。ネーションを越えて、その国の選手といっしょになって新たな代表になることは、ラグビー界では平気で行われていました」

杉本「素敵だなというか、それぞれ育ってきた文化が融合して、新しい文化を作っていくのが。国というナショナリズムを払拭して、それぞれが育ってきた文化を組み合わせることで新しいラグビーを作っていこうという考え方があるからかなと思います」

小田「日本でやっている多国籍の選手は日本の代表になりたいのです。日本の食べ物はとてもおいしいし、平和な国の日本に 3 年住んでみたい。今のルールではその間に日本代表になれますから。外国人選手で、東芝でやっている元キャプテンのリーチ・マイケル。彼は札幌山の手高校でラグビーを覚えたのです。日本のラグビーです。そういう人が日本代表のキャプテンをしているなんて誇らしい、素晴らしいと、みんな思っていますよ」

杉本「国を超えてひとつのスポーツという文化を示しているのがラグビーかなと思っています。日本のラグビー文化であって、日本の国のラグビーではない。国を超えて文化として

ラグビーを育てていこうという趣があるのかなと思います」

小田「それはあるかなと思います。日本ラグビー協会を世界で一番よい、親しみのある協会にしよう。女性もたくさん採用して、女性のラグビーも発展させよう。少年少女スクールから発展させようということです」

杉本「日本でラグビーをしたいという人たちが集まってくれる。そういうスポーツ文化の在り方が問われているのですね」

小田「商業主義で連れてきた人を、ラグビー選手に育てているというわけではないですから。日本大好きで来ていますから」

杉本「それがスポーツが文化として根付いていくことかなと思います。今日は、多様なお話をありがとうございました。小田先生の思いを十分に引き出すことができなかったかもしれませんが、『多様性と一つになることの裏腹』を読み解いていくヒントをたくさんいただいたように思います。ありがとうございました」

子ども未来・スポーツ社会文化研究所季刊誌第8号（2023年春号）

発行日 2023年4月22日

編集・発行者：子ども未来・スポーツ社会文化研究所代表理事 杉本厚夫

編集委員：西山哲郎、速水 徹、谷口輝世子、三角さやか（幹事）

一般社団法人 子ども未来・スポーツ社会文化研究所

Research Institute for the Future of Children and Sport Social Culture

<https://fcssc2020.jp> E-mail: info@fcssc2020.jp

